

河原五郎著 『河原徳立翁小伝』 補遺

宮地, 英敏
九州大学附属図書館付設記録資料館産業経済資料部門 : 准教授

<https://doi.org/10.15017/10155>

出版情報 : エネルギー史研究 : 石炭を中心として. 23, pp.131-136, 2008-03-28. 九州大学附属図書館
付設記録資料館産業経済資料部門
バージョン :
権利関係 :

【資料紹介】河原五郎著『河原徳立翁小伝』補遺

宮 地 英 敏

筆者は『エネルギー史研究』第二十二号で、河原五郎著『河原徳立翁小伝』一九二九年、非売品の紹介を行った。しかしその際、一部ページが落丁していたため、その部分に関しては欠落のまま復刻せざるを得なかった。ところが『エネルギー史研究』第二十二号の刊行後、河原徳立の長男であり瓢池園を継いだ河原太郎の孫にあたる河原福太郎氏から、落丁のない『河原徳立翁小伝』を所持しているというご連絡を受けた。また同様の連絡は、河原徳立の次男であった広瀬次郎（広瀬幸平の息子満正の娘と結婚し婿養子に入った）の関係から、愛媛県新居浜市の広瀬歴史記念館よりもいただいた。そこで、本稿では河原福太郎氏所蔵本を利用して前号の欠落部分を補いたい。

欠落部分は二ヶ所存在した。一つは巻頭に並んだ写真類であり、もう一ヶ所は日本陶器合名会社（現ノリタケカンパニーリミテド）設立のくだりである。このうち写真類には、三十代から六十代までの河原徳立が移っているが、痩身な人物であったことが看取できる。また、瓢池園から万国博覧会に出品された花瓶類や日本画が並んでいる。絵付の職人は

画才を發揮する者も多く、万国博覧会へは日本画も出品していたようであるが、日本画が直接の輸出品であったかどうかは不明である。その他にも、河原徳立自身が製作した陶磁器や書画の写真や、夜継庵得之の俳諧名を用いた際の印譜も紹介されている。

また河原徳立は幕臣時代に徳川家茂に従って上洛をしたが、その行程を書き記して養家および実家へ報告した書簡の一部が掲載されている。家茂は前年の文久三（一八六三）年に將軍として二九年ぶりの上洛を果たしたが、同年十二月二十八日には海路で二度目の上洛を行なうことになった。將軍が乗船した翔鶴丸をはじめ幕府と雄藩との八隻の連合艦隊による航行であり、十一日後の翌年一月八日には大坂へ到着した。しかしそれより遅れて一月三日に出発した河原徳立らの乗船した帆船二隻は、伊豆および紀州で嵐に遭遇してしまったために航程が非常に遅れ、二十四日後の一月二十七日にようやく兵庫に到着した。徳川家茂一行の旅程は良く知られているが、それに付き随った幕臣たちの旅程を知る興味深い記述である。

欠落部分の二ヶ所目は、官営模範工場設立の建議が政府に受け入れられなかった件と、日本陶器設立に関する件である。官営模範工場の件は、それまで京都市立であった陶磁器試験場が明治四十四（一九一〇）年に農商務省陶磁器試験場となることによって一応の解決をみている。² 明治初年の内務省に勤めた経験がある河原徳立としては、模範工場の設立は実現を望むところであったであろうが、当時としては農務省直轄の試験場設立を見たのは成功であったといえる。東京高等工業学校教授であった平野耕輔（後に陶磁器試験所長となる）も、明治四十五（一九一一年）に国立陶磁器製造所の設立を農商務省に建議していることから、³ 官営模範工場の設立を訴えた河原徳立は当時の陶業界の声を代表していたと見て良いであろう。

続く森村組による日本陶器合名会社設立は、森村組の専属上絵付工場となっていた瓢池園にとっても重大な事項であった。⁴ 森村組ニューヨーク支店である森村ブラザーズよりもたらされるアメリカ市場情報に基づき、流行に合わせてデザインや形状を常に変化させていた森村組とその専属上絵付工場にとって、解決すべき点として残されていたのが磁器の純白さの不足であった。チューリンゲンでドイツ製の製陶機械一式を購入し、ベルリンの粘土化学工業研究所では原料粘土の化学分析を行なって、漸くと明治三十七（一九〇四）年に創立へと漕ぎ着けた。

河原徳立にとってこの日本陶器設立が重要な理由はもう一つある。三男の河原三郎（百木家に養子に入り百木三郎となる）である。彼は東京高等工業学校を卒業後に農商務省海外実習生として渡欧したが、この渡欧中の滞在費等は、大倉孫兵衛より出されており、帰国後も大倉孫兵衛の下で製陶実験を行っていたのである。百木三郎は日本陶器合名会社設

立にあたり、飛鳥井孝太郎技師長の次席として採用された。日本陶器合名会社が純白磁器や大型製品の生産技術が未熟で苦悩する中、東京芝浦電気のアヅマ二郎より依頼を受けた特別高圧碍子生産にあたった百木三郎は短期間で成功し、日本陶器合名会社の草創期における経営を支えた。その後も主に工学の知識を駆使して活躍し、共立原料株式会社（現共立マテリアル株式会社）や東洋陶器株式会社（現OTTO株式会社）の社長を歴任している。

本書の復刻にあたっては、従前どおり漢字は基本的に新字体に改めた。また適宜句読点を補った。

二十二号の欠落部分

巻頭写真目次

- 一、 仏 明治八年 三十歳 同二十三年 四十五歳
- 二、 同 明治四十二年 六十六歳
- 三、 記念撮影 千八百七十八年 仏国博覧会審査官同列
- 四、 拝受の藍綬褒章並二仏国勲章
- 五、 千九百年巴里万国博覧会瓢池園
出品物
- 六、 自作記念品
- 七、 軸、短冊、俳諧三句
- 八、 書簡手記
- 九、 夜継庵得之印譜



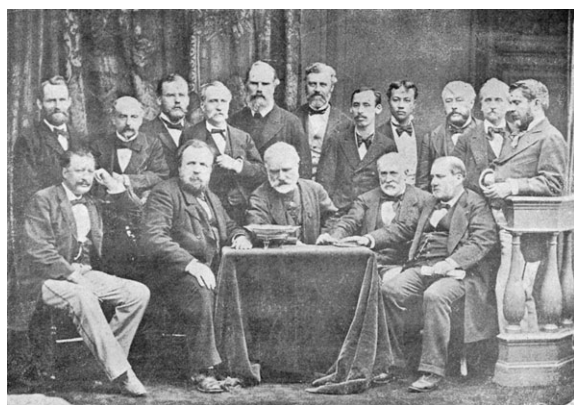
明治八年写 (三十歳)



明治二十三年十二月三日写
(四十五歳)
藍綬褒章拝受記念



明治四十二年十月二十九日写
徳立翁 (六十六歳)
室録子 (六十二歳)



明治十一年六月 (西曆一八七八年) 写
巴里万国博覧会陶磁工芸品各国審査官中の翁
初回の渡仏にして三十三歳の時・後列右より五番目



仏国勲章
オフヒシエーダカデミー
明治三十四年七月佩用
允許せらる



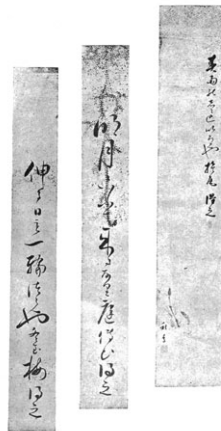
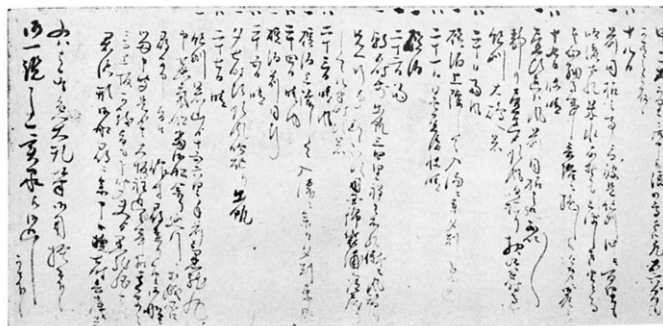
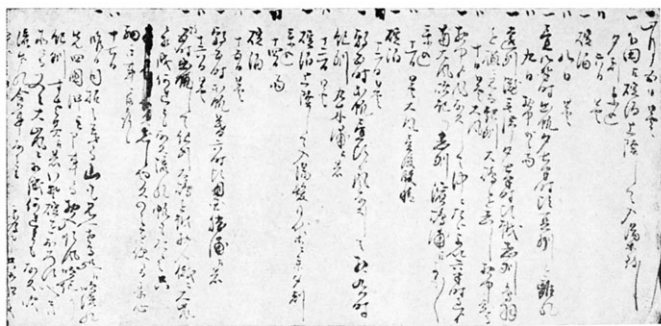
藍綬褒章
明治二十三年十一月一日
下賜せらる
明治三十六年十二月十四
日飾版を下賜せらる



(右) ふくべ焼湯呑 嵐雪の蒲団の端を仮寝かな
岡崎新居の句自著あり
(中) 砂糖壺 明治三十年代瓢池園作品の一なり
(左) 戯作急須 月をみるこゝろも空にすみにけり
丙午初秋 六三翁 得之 録旧作を刻す



明治三十三年（西曆一九〇〇年）
巴里万国博覧会々場内 瓢池園出品の一部



(右) 春雨のしみ込むいろや捨瓦
得之
(中) 明月といふて来るなり庭伝ひ
得之
(左) 伸る日を一輪つゝや冬至梅
得之

此の先考書簡は、元治元年一月、家茂、公の海路上洛に際し、御供したる当時の遭難手記なり。御用船は二隻の西洋型帆船にて、同月三日品川沖を出て、途中屢々暴風雨等の大危難に会し、二十四日を費して漸く兵庫港に着し、大坂を経て入洛せしなり。此の手記は養家河原自宅宛に送られたるものにして、文末実家とあるは渡辺家を指したるなり。当時、乗込みに際して随伴の士は、緋羅紗の陣羽織を纏ひ、法螺貝を吹立て、市ヶ谷見付に勢揃せり。河原の槍の長しとて、柄を切りし事も御進発御伴の時なりしと謂ふ。

正月五日 曇
一、下田へ碇泊、上陸して入湯等致し、夕刻乗込
同 六日 曇
一、碇泊
同 八日 曇
一、昼八時出帆、夕七半時頃、豆州を離れ
同 九日 夜中少々雨
一、遠州灘無滞夕七半時頃越 志州鳥羽を横に見る紀州大島を志し夜中走る
同 十日 曇大風
一、夜中より風なくして沖にたゞよひ、六半時過より南大風吹起り、志州浜崎浦によつゝ乗込
同 十一日 曇大風 昼後快晴
一、碇泊
同 十二日 曇
一、朝五時出帆、昼頃よりかぜなくして、夜九つ時紀州九木浦に着
同 十三日
一、碇泊、上陸して入湯、髪月代等に参、夕刻乗込
同 十四日 雨
一、碇泊
同 十五日 曇
一、朝五時出帆、暮六時頃、同国勝浦に着
同 十六日 曇
一、朝五時出帆して紀州大島を越、夜入俄に大風と相成、何れとなく流れ、帆もたゞみ、只じしゃくのみを便にて、甚心細き事に御座候
同 十七日
一、昨日同様の義にて、山も見へざる処に吹流され、先四国沖と申事にて、夜入順風吹起り、紀州すさきへ着、いざ碇をおろすへき処にて又々大風に相成、何れともなく吹流され食事など不及申、只御船の中にくるがかり居申候、浪の高さは凡五六間も可有之存候

- 十八日
 同 前同様の事にて、彼は紀州沖に百里も吹流され、炭水などもとぼしき由にて、其心細き事、言語に絶し候次第に御座候
 十九日 快晴
 一、昼頃迄は風前同様の処、おい々、静り、昼過より順風吹起り、夜九半時過、紀州大島へ着
 二十日 雨風
 同 碇泊、上陸して入湯に参り、夕刻乗込
 二十一日 曇昼後快晴
 一、碇泊
 二十二日 雨
 一、朝五時前出帆、三四里程はなれ俄に風替り、先へ行事あたはず、同国錦袋浦へ後戻りして八半時頃着
 二十三日 晴風
 同 碇泊、上陸して入湯に参り、夕刻乗込
 二十四日 晴風
 一、碇泊、前同断
 二十五日 晴
 同 夜七時頃、順風吹起り出帆
 二十七日 晴
 一、紀州若山より十五里手前にて、黒龍丸と申蒸気船、当御船余り延引に相成、安否尋可申旨を被仰付、尋参り候由、御船を留申聞、是よりは太坂程近く、事控へ其まゝにて上坂可致旨も申聞、夫より黒龍丸は鷹信形御船等に参申候、暁七時兵庫へ着
 右は取急大乱筆御用捨被下度候、御一覽の上、実家へ御廻し可被下候



二世夜繼庵得之印譜

二十二号の欠落部分 (一〇六頁)

後年転じて、同業及有志者の間を幹旋奔走し、各種の關係団体を説き、彼の仏国セーブル又は独逸国立製陶所に倣ひ、官立模範工場設置の件を当局に要望建議すること、実に前後三回に及びしも容れられず。唯、農商務省工業試験所の一部となりて、僅に其の一端を実現するに止まりしは、翁をして満足せしむるものに非ざりき。

然れども、茲に其の宿志を実現し、快心此事なりと叫ばしめたるものは、瓢池園の事業を援助し来れる、森村組故森村市左衛門、及故大倉孫兵衛の両氏並に他の同志諸君に由て、明治三十六年、日本陶器合名会社の創立を見たる一時なり。会社は範を欧州製陶術に採り、大工場を建設し、最新の学術を応用して初めて我が国に硬質磁器製造を完成するに至れり。其の功績の国家的に顕著なるは、故森村翁に授爵、故大倉翁に緑綬褒章の御下賜により、首肯するに難からざるべし。翁は我国に進歩せる欧州製陶法を推奨し、紹介したれども、唯是れ師事心醉せんとす(るものに非ず。)

付記

今回の資料紹介は、科学研究費補助金・若手(B)「近代日本陶磁器業にみる複層的な経営の存在について」の研究成果の一部である。

注

- (1) 松浦玲『幕末・京大坂 歴史の旅』朝日新聞社、一九九九年、一五三・一五六頁。ただし二隻は遅れたので、このとき將軍と共に大坂へ到着したのは六隻である。
- (2) 鎌谷親善「京都市陶磁器試験所」(一)、『化学史研究』第四〇・四一号、一九八七年。
- (3) 植田哲哉『名工研陶磁器部門75年の歩み』名古屋工業技術研究所、一九八八年、二・三頁。
- (4) 森村組による日本陶器合名会社設立に関しては、宮地英敏「明治期日本における「専門商社」の活躍」『企業家研究』第二号、二〇〇五年および宮地英敏「近代日本陶磁器業における機械制大工業の成立」『東京大学経済学論集』第七十一巻第二号、二〇〇五年による。
- (5) 元治元年は西暦一八六四年である。前年の文久三(一八六三)年に將軍徳川家茂は、將軍として二九年ぶりの上洛を果たした。そして同年八月十八日には一橋慶喜・会津藩・桑名藩(一会桑)と薩摩藩などの公武合休派が謀り、長州藩をはじめとする尊皇攘夷派を京より追放している。新撰組の活躍もこの時期であり、元治元年には長州藩尊皇攘夷派を襲撃した池田屋事件が起きている。また会津藩や薩摩藩により京にいる長州藩勢が壊滅させられた禁門の変も起きるなど、幕末の京において幕府および公武合休派の影響力が最も強い時期であった。
- (6) 多田実「幕末の船艦購入」『海事史研究』創刊号、一九六三年によると、黒龍丸は文久三(一八六三)年にアメリカで建造されたばかりの木製内輪式蒸気船コムシング号を、幕府が購入して改名していた船舶であった。